

池波正太郎

新潮社

江戸切繪圖散歩



「小説新潮」1988年1月号～12月号連載

「近吾堂版江戸切絵図」、楳形紹真「大江戸鳥瞰図」は林唯特記した以外の写真は、「小説新潮」編集部田村邦男撮影
題字、各章カットは筆者

江戸切絵図 散歩		一九八九年三月一五日 発行 一九八九年七月五日 七刷	著者 池波正太郎	発行者 佐藤亮一	発行所 株式会社 新潮社	郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一 電話 業務〇三六五一一 編集〇三六五四一 振替東京四一八〇八	印刷所 大日本印刷株式会社	製本所 加藤製本株式会社	価格 はカバーに表示しております。
----------	--	-------------------------------	----------	----------	--------------	--	---------------	--------------	----------------------

© Shotaro Ikenami 1989, Printed in Japan

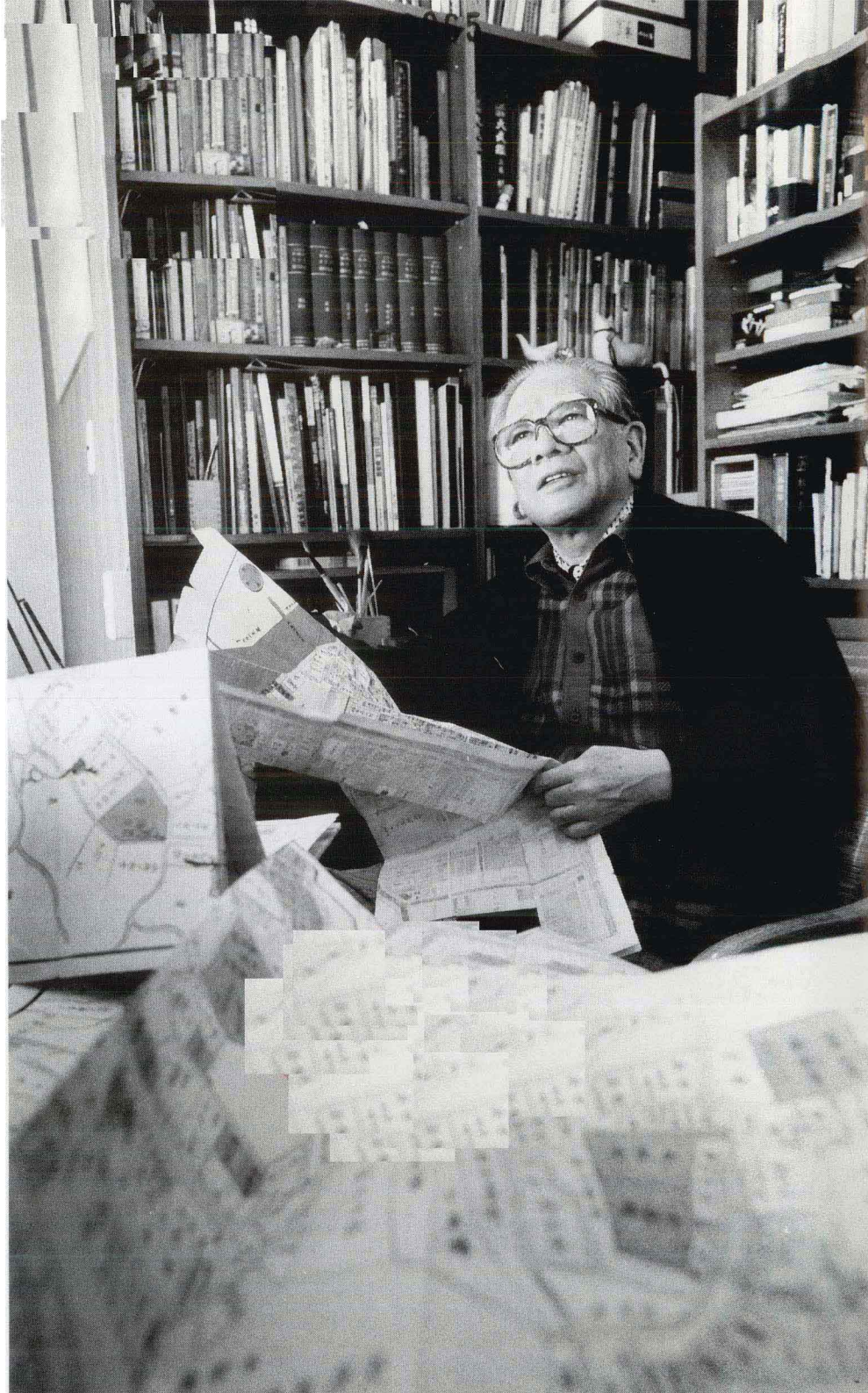
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-301242-0 C0095

江戸切繪圖散歩

池波正太郎

新潮社



江戸鉞形紹真筆



江戸切絵図散歩 目次

第一章 上野界限 4

第二章 大川(一) 12

第三章 大川(二) 20

第四章 築地界限 28

第五章 日本橋 36

第六章 神田と本郷 44

第七章 皇居周辺(一) 52

第八章 皇居周辺(二) 60

第九章 渋谷と青山 68

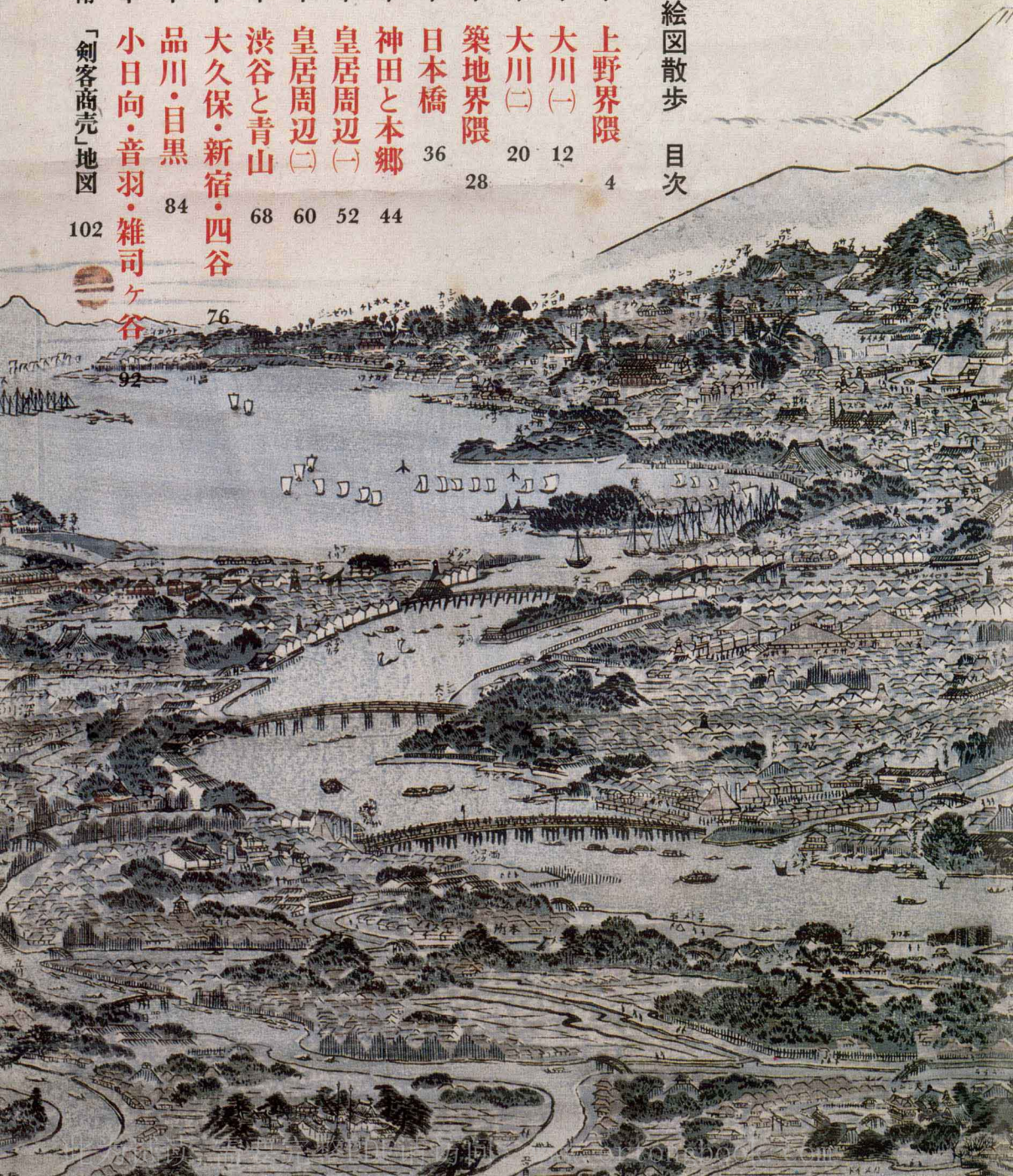
第十章 大久保・新宿・四谷 76

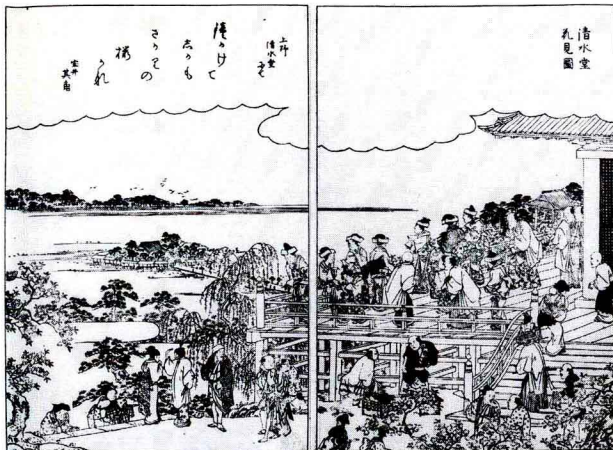
第十一章 品川・目黒 84

第十二章 小日向・音羽・雑司ヶ谷 92

附 「剣客商売」地図

102

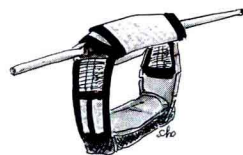




江戸名所図会 清水堂藤見図

第一章

上野界限



江戸時代、それも徳川幕府の政權が安定し、独自の文化が生まれ、成熟するにつれ、つぎつぎに刊行された「地図」の美しさは、いくら見ても見飽きることがない。

日本の、江戸の職人の巧妙繊細な手指のはたらきが、このように美しい木版刷りの地図を生んだのだ。

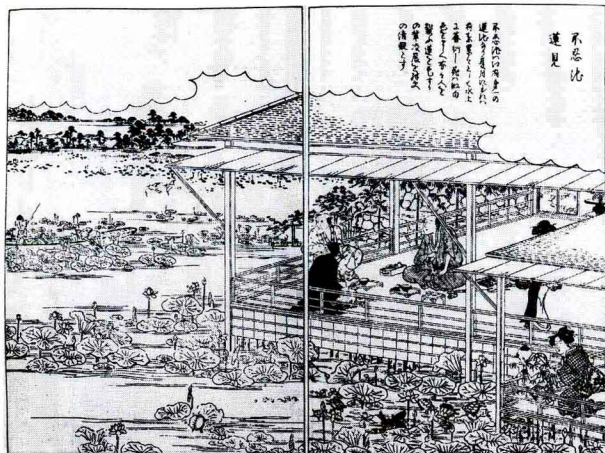
中でも、地域別につくられ、携帯に便利な「切絵図」は、私のような、江戸期を舞台にした時代小説を書いている者にとっては、欠かせないものだ。私は「切絵図」と共に毎日を送っているといつてよい。

私が、はじめて切絵図を買ったのは昭和三十年の秋だ。そのころの私は、まだ小説を書いてはいず、芝居の脚本・演出をしており、折柄、名古屋の御園座へ出演している新国劇の稽古に行き、近くの古書店で買った。

嘉永二年（西暦一八四九年）、麹町十丁目の近吾堂が蔵板したもので、保存もよく、桐箱に三十余の切絵図が入っているのを見ると、衝動的に買ってしまった。

当時でも古地図は高価なもので、保存もよかった所為か、切絵図一揃が、私の脚本料より高かったことをおぼえている。その日、ちょうど脚本料を手にしていなかったら、おそらく買わなかったろう。

その後、小説を書きはじめ、数種の古地図や切絵図を手に入れている私だが、このときの切絵図は、いまでも使用している。木版の刷りも、堅牢な紙も、びくともしていない。手許において、一日に何度となく手に取る、この切絵図を見ると、私は、江戸



江戸名所図会 不忍池蓮見

の文化を想わずにはいられない。

斎藤幸雄・幸孝・幸成の父子三代の長年月をかけて完成された「江戸名所図会」の絵を描いたのは長谷川雪旦だが、この古書と切絵図を合わせ見るとき、古き江戸の町や、人の姿が彷彿として脳裡に浮かんでくる。

ともかくも、切絵図を手に入れてからの私は、東京の何処へ行くのにも、行先の地域の切絵図をポケットに入れ、家を出たものだった。

そして、当時の東京の地形が、江戸のころと、それほど変わっていないのに気づいたのである。

東京は台地が多く、つまり凹凸の多い地形で、いたるところに坂道がある。したがって、景観は変わっても、道筋はあまり変わっていなかった。もっとも現代は坂道も台地も恐るべき機械力で押し崩してしまふようになったが、それでも意外に地形は変わっていないのだ。

江戸は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて「江戸氏」のものだった。江戸の地名は、これに因る。江戸氏が滅びた後、およそ百年にわたって放置され、草深い片田舎になってしまった。

赤坂・麻布・湯島・高輪・本郷などの台地の狭間に、いくつもの川がながれていて江戸湾（東京湾）にそそぎ、台地は深い樹木につつまれていた。

江戸湾は、いまの皇居の、すぐ近くまで入り込み、漁舟が浮かび、鷗や千鳥が群れをなして空をわたっていた。

やがて、江戸に太田道灌は居城を築いたが、道灌亡き後に、長い戦国の時代となる。諸国の戦乱は破壊と共に、当然ながら、道路や河川の発展をもうながした。

天下を手中におさめた豊臣秀吉が、徳川家康を江戸の地へ封じたときは、「……東の平地は何処も彼処も、いちめんの汐入りの葦原で、町屋も侍屋敷も、十町と割りつけることもできず、西南の方は、そのまま菅原の武蔵野へつづき……」と、物の本にある。

徳川家康は、

（このような土地へ、どのように町づくりをしたらよいものか？）

佐竹次郎

[illegible]

立花左近將監

丁名廣

本阿
三節
同
北大

1954年10月

25

伊藤

卷之四

[illegible]

五九庚申
午子
夜楊方奎
歷主利庵
並勸曉諭師

[illegible][illegible][illegible]

4

池之端
仲町

池之端
什町

100

美丘寺

法養寺

唯念寺門前

[illegible]

御書頭。俗稱組。
 邊見申寺組
 寺園心

[illegible]

1980

江戶屋五平

板元

—

100

1947

北





上野広小路 ビル後方が不忍池 右手は上野公園口

考えあぐねてしまったらしい。

明治のころ、ある人が、

「東京は、山都である」

と、いったように、明治時代までは、台地へのぼると、富士・筑波^{つくば}の両名山や日光・丹沢の山なみ、さらに信州の浅間山まで、見ることができたのだから、家康が人府して来たころの江戸が、どのような土地であったか、推して知るべしだろう。

東面の海（江戸湾）と、清らかな水をたたえた大小の河川と、四季の移り変りがはっきりと定まった江戸の風土が、徳川家康の町づくりに大きな影響をあたえたことは、いうをまたない。

江戸は、家康の開府^{かふ}から寛永・明暦・元禄の時代を経て、安永・寛政・文化・文政の爛熟期を迎え、その文化と風俗は、いよいよ多彩となって行くのである。

まず、こころみに近吾堂版の切絵図「外神田・下谷・上野」の一冊をひろげて見ようか。

図面の左端に、上野の黒門^{くろもん}と不忍池^{しのぶの池}がある。現代は上野公園となった黒門口の石階段の上に立ち、広小路から神田方面をながめると、地形は、ほとんど変わっていない。

私は少年のころ、このあたりは毎日のように歩きまわっていたが、当時の地形そのままである。

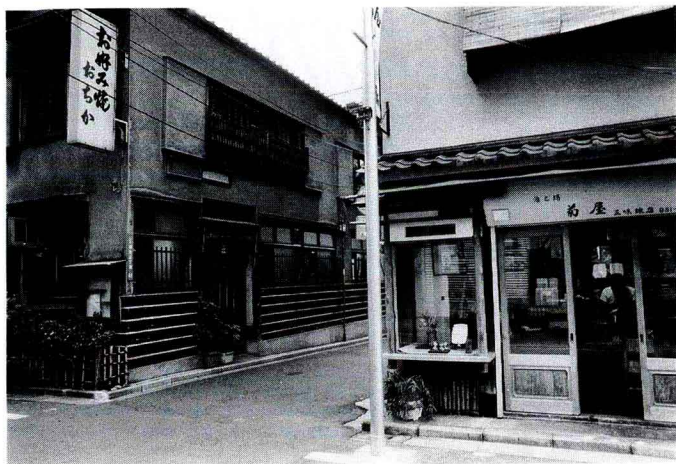
上野山内には、かつて、徳川將軍家の菩提所^{ぼだいじょ}として名高い東叡山^{とうえいざん}・寛永寺^{かんえいじ}の堂宇が、いっばいに建ちならんでいたものだが、明治維新後に、新政府が没収して、これを東京の公園とした。なればこそ、地形が旧態^{きうたい}をたもっているといえよう。

上野とは、歴史的にも景観においても、

「切っても切れぬ……」

不忍池が、戦後のあるとき、埋め立てられかけて野球場にされようとしたことがあった。

地元の人びとはおどろき、結束して反対運動を起し、ついに野球場は中止となったが、もしも上野の山と、その周辺が民間に払い下げられていたとしたら、どうなったか知れたものではない。



池ノ端仲町(現在の上野二丁目付近)の町筋

もつとも、東京都は、由緒ある日本橋の頭上へ高速道路をかぶせるという無謀安易な事を実行してしまったのだから、公園であろうが何であろうが、油断はならないのだ。

徳川家康以来、歴史の重味が積みかさなった皇居（江戸城）へ、激増する車輛のために大道路か高速道路を、

「建設したほうがよい」

などと公言した政治家がいたそうだから、上野の山の今後も、絶対に安全だとはいえないのである。

切絵図の不忍池の東端に「上野仁王門前丁」とある。この一角に上野日活館という映画館があつて、鉢がのめり込みそうに鋭く傾斜した三階席で、私は、どれほど戦前の日活映画を観たか知れない。

広小路の「北大門町」の一角には、寄席の「鈴本」があつた。子供のころから此処へも通つて、あぶらの乗りきつていた故桂文案の落語を聞いた。

あるとき、高座へあがつて来た文案へ、

「よかちよろ（商家の旦那が吉原の花魁に夢中になる話）演つて」

と、注文をつけたら、

「子供のくせに、そんなませたことをいっちゃあいけません」

苦笑しながら、文案にたしなめられたことが、つい昨日のことのようにおもえる。

この「鈴本」の裏手が、下谷の花柳界で、夕暮れどきに、置屋の前の細道を通ると、芸者が双肌ぬぎで化粧をしているのを窓の簾越しに見たことがある。

芸者町の北側の表通り（仲町通り）は、池ノ端仲町で、品のよい商家や、名前の知れわたった蕎麦屋などが軒をつらね、その町筋にただよう物静かな雰囲気は、子供ごろにも心をひかれるものがあつた。

けれども現在は、このあたり一帯、ことに一步、裏へ入ると、ケバケバしい電気看板が犇めいて、別の町へ来てしまったようだ。

むろんのことに、しっとりとした三味線の音もきこえてはこない。地形は残つても、風俗は怒濤のように変る。



須原屋版江戸大絵図(部分) 上野・浅草あたり 寛政八年(1796)

そして、風俗が変れば人の心が変わって行く。いや、人の心が変わるからこそ、風俗が変るのだろうか……。

少年というよりも、まだ幼年のころの私は、夏になると祖父に連れられて、不忍池へ蓮の花を見に行った。早朝である。そして帰りに、上野日活館近くの「揚出し」という豆腐料理で朝餉をした。この店は洋画家の故小糸源太郎氏の生家だ。

子供にとって、豆腐料理などは、さして旨くはなかったけれども、何となく清げな大座敷、美しい器物に盛りつけられた料理。我家の新香とは全くちがう茄子や胡瓜、これだけは、子供ごろにも旨いとおもったものだ。

「揚出し」は、私が自分の金で物を食べられるようになってからも、営業をしていたので、友だちと何度も通った。

切絵図の左方、上野の山下から、東へ、浅草の方向へ、まっすぐに伸びている通りを「新寺町通り」という。現在の「浅草通り」だ。

江戸の古地図は大小の武家の屋敷と、神社と寺院の名前だけは洩らさずにのっているが町民の名は全くのついていない。また、一般の庶民にとって、切絵図などは必要もなかったろう。私の祖母などは死ぬ前に一度、京都へ行ったらしいが、あとは自分が住み暮す町内から、ほとんど出たことはない。

だが、同じ町民でも、たとえば武家方へ出入りする商人などにとっては、切絵図は必需品であったろう。

また、

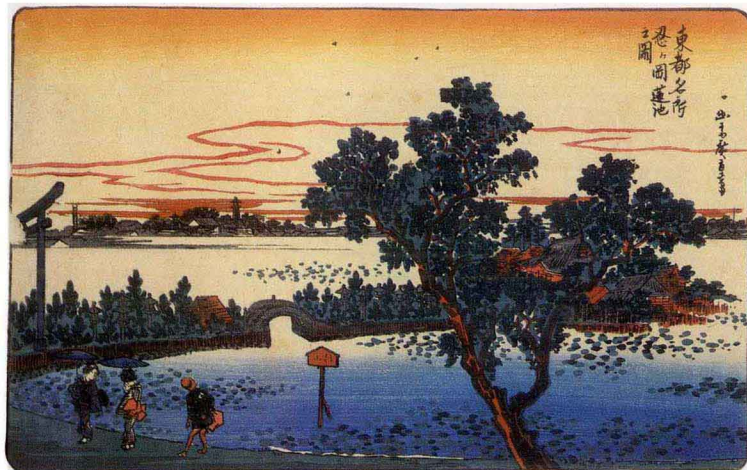
「あの人は、下谷の広徳寺の裏に住んでいる」

と、聞いて、その人を訪ねようとすれば、切絵図をひろげて見ると、たちどころに広徳寺を見出すことができる。

広徳寺は、新寺町通りの北側に、いまもある。そのとなりが下谷の区役所(現・台東区役所)で、私は戦後の一時期、この区役所につとめていたことがある。

尚も、新寺町通りを行くと、切絵図の左上方に「善立寺」の名を見出すことができる。

私が幼少のころをすごした、浅草・永住町の家は、江戸時代の善立寺の境内だった



広重 東都名所・忍ヶ岡蓮池之図 東京国立博物館

のではあるまいか。それほど大きな寺だったことがわかる。永住町は明治以後にできた町名で、このあたりが、下谷と浅草の境になった。

上野公園は、小学生の私たちにとって、絶好の遊び場所だった。私の家は、浅草と上野の中間にあり、小学校は上野の山に近かった。

戦後、海軍から復員した私は、取りあえず、東京都庁・衛生局の職員となり、下谷区役所内の防疫課へ配属された。当時、猖獗をきわめていた発疹チフスを防ぐためだった。街には、家を失った浮浪の人びとがあふれ、東京都は、上野山内に仮小屋を設け、これを収容した。

切絵図の、上野山下から三ノ輪へ向う通りの西側が、上野の山で、山裾には多くの子院があり、崖上には「このあたり、桜木多し」と、切絵図にしろされてある。浮浪の人びとを収容した仮小屋は、其処に設けられた。現在の「上野の森美術館」や「東京文化会館」がある辺りで、当時の面影は全くない。

(これが、あの上野の山か……)

当時を知る者が瞠目するほどに美しく、清潔な上野の山になってしまった。

だれが名づけたか知れないが、仮小屋の群れを、

「葵部落」

と、よんだ。

葵は、徳川将軍の紋所である。上野の山と徳川家との関係から、この名がつけられたにちがいない。

切絵図の中段の上部に、出羽ノ国久保田二十万五千八百石の大名・佐竹次郎の宏大な屋敷が見える。ここは後年、いかにも下町らしい盛り場となり、中央の通りを「佐竹通り」とよんだ。私の家からも近く、母や祖母が、よく夕餉の物業を買いに出かけたものだ。

映画館も三つあり、関東大震災前までは寄席もあったそうな。



大川と永代橋 ひろびろとした川面を行く船

第二章

大川(一)

私は、大正十二年一月二十五日の朝、浅草の聖天町に生まれた。

切絵図の「今戸・箕輪・浅草絵図」を見ると、下方の大川（隅田川）と山谷堀が合流するあたりに「真土山・聖天宮」があり、その左側の町の一角で、私は生まれたことになる。この年は、間もなく関東大震災が起り、私は父母と共に、埼玉県浦和市に逃れ、そこに六年間を暮したから、聖天町の生家の記憶はないし、いまは町の姿もすっかり変って、祖母や母から聞かされた、あたりの風物を偲ぶこともできない。

聖天町の西側一帯は、猿若町で、江戸中の主な芝居小屋が此処にあつまっていたわけだが、いまも、藤浪の小道具の事務所と倉庫・仕事場が残っており、往年の芝居町の面影を、微かに、とどめるともいえずにとどめている。

その近くに、姓名は忘れたが、産婦人科の医院がある。亡母にいわせると、亡父ならびに私が生まれたとき、世話になった産婆さんと同じ姓だそう。場所も同じである。もしやすると、その産婆さんの息子さんが医者になっているのだろうか……。

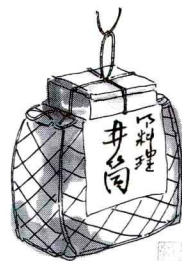
母が私を生んだころの、大川の水は清らかで、父方の祖父が、

「よく、沙魚を釣って来なすった」

そうだが、おそらく鰻や小さな鰯も釣れたにちがいない。

大川を対岸へ渡るには竹屋の渡しとよばれた渡し舟に乗ったわけで、

「雪の朝なんか、何ともいえないほど景色がよくて、廣重の錦絵を見ているようだ……」





浅草聖天町(現在の浅草七丁目)の生家あたり 昭和43年 筆者撮影

と、母はいつていたが、おそらく、そのとおりだったろう。

聖天町から今戸、橋場、さらにさかのぼって千住大橋のあたりは、私の小説の舞台だ。このあたりの風色を何度書いたか知れない。

仕掛人・藤枝梅庵がなじみの料亭「井筒」は橋場にあるし、剣客商売の、秋山小兵衛隠宅は川向うの鐘ヶ淵にある。

このように、私が大川の風物に心ひかれるのは、自分が生まれた土地でもあり、世の中へ出て、自分の金を遣えるようになったころまで、大川を船宿の船で数え切れないほど、行ったり来たりしたからだだろう。

江戸時代には大川のほかに大小の川が江戸市中を四通八達しており、小舟があれば、たいいていの場所へ行けたのである。

秋山小兵衛が大川辺りの隠宅に小舟を所有していて、しきりに川筋を利用するのは、つまり、自家用車を持つているのと同じ便利さなのだ。

切絵図の「隅田川・向嶋絵図」をひろげると、川向うの寺嶋、渋江の村々から、大川沿いの三囲稲荷、長命寺、牛御前などの名所古蹟など、すべて描かれている。

東京は、ことに大川の兩岸は戦災がひどく、江戸の香りは何処にも残っていない。いながししかし、東京オリムピックが開催するまでは、開発の名による破壊も今日ほどではなく、足にまかせて歩きまわっていると、おもいもかけぬ江戸の名残りを見出すこともあった。

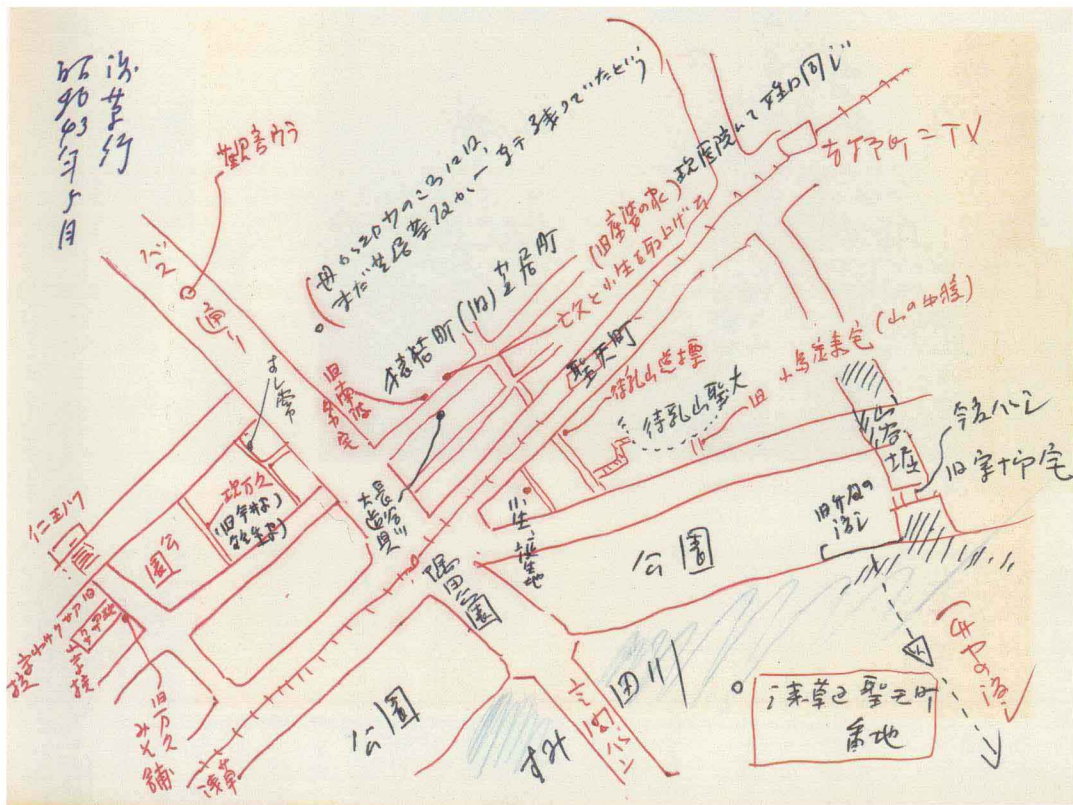
私の生家とは目と鼻の先の真土山(待乳山ともいう) 聖天宮は、江戸開府のころは、かなり、大きな山だったらしい。それが元和五年に、徳川幕府は削り取ってしまった。すなわち、荒川の洪水にそなえ、いわゆる土手八丁の長堤を築いたのだ。

それより、五、六十年の間は、このあたりの荒涼たる景観は物凄じかりのものであったらしく、

「堤の、夜の闇の中を歩いていると、どこからともなく、なま臭い血のにおいがただよってきて、肌に粟を生じた」

などと、むかしの本に書いてある。強盗や辻斬りが絶え間もなかったのだ。

明暦三年に、幕府公認の遊里(新吉原)が、日本橋から日本堤の南側の、浅草・千束



筆者による生家あたりの地図 昭和43年 5月

三社祭・浅草寺境内に入る神輿 5月18日



